

児島高德桜樹に書するの因に題す  
(斎藤監物)

踏み破る 千山 万嶽の 煙

鸞輿 今日 何れの 辺にか 到る

单簑 直ちに 入る 虎狼の 窟

一七 深く 探る 鮫鰐の 洄

報国の 丹心 独力を 嗟き

回天の 事業 空拳を 奈んせん

数行の 紅涙 兩行の 字

桜花に 付与して 九天に 奏す

踏破千山萬嶽煙 鸞輿今日到何邊  
單簑直入虎狼窟 一七深探鮫鰐淵  
報國丹心嗟濁力 回天事業奈空拳  
數行紅淚兩行字 附與櫻花奏九天

解説 児島高德は後醍醐天皇が隠岐に遷幸されるのを奪還しようとして果たせず、因の莊の行在所に潜入し、桜の幹を削り二行の詩句を書し、自分の微衷を奏上した故事を素材に詠じたもの。

語釈 ※踏破Ⅱ踏み越えての意。 ※千山万嶽Ⅱ幾重にも層をなして聳える山々。ここでは遠いことと行路の難儀をいう。 ※鸞輿Ⅱ天子の乗り物をさす。 ※单簑Ⅱ一人での意。 ※虎狼窟Ⅱ虎や狼の潜む岩穴。ここでは天皇を警備している北条の警護陣をさす。 ※一七Ⅱひとふりの七首。鋭利な短刀の意。 ※鮫鰐洄Ⅱサメ。ワニが棲む洄。北条方の嚴重な警固をさす。 ※報国丹心Ⅱ国恩に報いんとする忠誠心。 ※回天Ⅱ天日をもとの晴れ輝く状態にする。 ※紅涙Ⅱ血のにじんだ涙。 ※付与Ⅱあたえる。 ※九天Ⅱ天子の所在される所。

通釈 幾重なる山々は高く聳え雲に囲まれている。天子の後を慕い、乗物を奪わんと、峰々を越え、美作に至って見れば、すでに乗物は因の莊に進まれたとか。天下悉く北条の勢となるうとも、この高德一人いる事を天子に知って戴き、御心を慰さめたい。夜陰にまぎれ、ただ一人一本の七首を擁して虎狼の窟、鮫鰐の洄ともいうべき堅固な陣屋に忍び入った。一人の力では、いかに報国の丹心をつくし、回天の事業を成さんとしても不可能である。自分の非力に無念の涙はつきない。せめて、天子の近くに仕える者のあることを知って戴こう。桜の幹を削り、認めるはただ二句。(天、勾踐を空しうする莫かれ。時に茫蝨無きにしも非ず)。聡明なる天子のことであるから、必ずこの句をお読みになり、高德の微衷を汲み取り戴いたことであろう。